

## 歴史よもやま話 その6.

### 近衛 前久

戦国時代におよそ公卿らしからぬ公卿がいた。近衛前久という。平安時代、「この世をばわが世とぞ思う望月の欠けたることのなしと思へば」という歌を詠んで得意絶頂期を迎えていた藤原道長の子孫である。道長の後、紆余曲折の末、藤原五摂家（近衛、鷹司、一条、二条、九条）に分家したが、前久はその筆頭・近衛家の当主であった。18才で関白・左大臣となり位人臣を極めた。

また、昭和になって、総理大臣を拝命し日米開戦を回避すべく働いたが、軍部の圧力に抗しきれず、東条英機に席を譲らざるを得なかった近衛文麿は前久の子孫である。

前久が位人臣を極めたとはいえ、当時の政治、経済は武士階級が掌握しており、朝廷や公家は権威だけは維持されたが無力であった。武家の頂点は制度上足利幕府であったがこれも有名無実化し、幕府管領と言われるナンバー2 周辺が勢力争いを続けるなか、守護階級である大名が勢力を増しつつあった。

長尾景虎（上杉謙信）が5000の兵を擁して近江・坂本に着陣したとき、前久は単身坂本に赴き景虎と血の盟約を結ぶ。景虎上洛の目的は、足利幕府に関東平定を認めて貰うことで、征夷大将軍・足利義輝、関白・近衛前久と三人で酒を酌み交わし肝胆を相照らしたという。前久はこの血書のなかで、越後下向を誓っており、翌年越後に、そして厩橋（現在の前橋市）に赴き、関東平定に景虎と行動を共にする。

この途上、武田信玄による信濃攻撃の情勢が伝えられ、景虎は急遽越後に帰ってしまう。前久は関東に残って古河城に入り、景虎不在の関東平定の拠点にしようとする。しかし北条氏康の巻き返しに裏切る武将が相次ぎ、前久は厩橋に撤退せざるを得ない情勢になった。信玄との第四次川中島合戦で手を抜けない景虎は関東平定に兵を向けることができず、前久は失意のまま京に帰る。景虎は慰留したが翻意せず、景虎は立腹したと伝えられる。

前久が帰った京では政情不安定、永禄の変（将軍義輝の殺害）が起こり、三好三人衆は義輝の従兄弟・義栄を14代将軍に据えるべく前久に協力を強要、仕方なく従うことになる。しかし義栄は短命で病死してしまい、この時期に織田信長が足利義昭を擁して上洛、義昭を15代将軍に就かせる。

義昭は、前久を永禄の変の協力者と疑い、また、前久のライバルであった二条晴良が義昭に近づき前久の追い落としを謀ったともいわれる。

前久は丹波・黒井城に、妹婿・赤井直正を頼り京から離れるがのち、本願寺・顕如の元に身を寄せる。

時が経ち、信長は義昭を追放、関白・二条晴良も疎んじられると、前久は京に戻ることになった。

信長は、広い人脈を持ち交渉能力に長けた前久を高く評価しており、前久も信長なら天下を太平にできると期待していた。この時期、信長は中国地方の毛利輝元を討つ計画を立てており、北九州の大友宗麟の協力を得て輝元を挟撃しようとしていた。宗麟は薩摩の島津氏と交戦中。そこで信長は前久に島津氏に大友氏と和睦するよう工作を依頼した。しかし交渉は難航した。近衛家は「古今伝授」の秘伝が代々伝えられる家であり、前久はこの奥義を島津氏に授けた。鎌倉時代から守護大名であった島津家では和歌など中央の文化に憧れ尊重する気風があり、奥義を伝授され感激した島津氏は大友氏との和睦を受入れる。

さらに信長は、10年来争っていた石山本願寺・顕如と講和したいと望んでいたが顕如は応じず、ここで前久は仲介に乗り出し、信長から朱印状を得て顕如をして信用させることに成功、本願寺開城に導いた。

信長は、前久の数々の協力に感激し、所領一国を与える約束をしたという。

また二人は、共通の趣味であった鷹狩りに度々興じ、付き合いを深めていった。

信長は、毛利攻略を含め全国制覇の仕上げともいうべき甲斐・武田勝頼征伐に取りかかり、前久は信長に従軍する。

そして本能寺の変を迎える。前久にとって信長の死は大きな衝撃であり、醍醐山で剃髪し仏門に入り「龍山」と号し、さらに京嵯峨に逼塞する。

豊臣秀吉が明智光秀を滅ぼした山崎の合戦後、明智光秀謀反の黒幕との疑いを掛けられている。諸説あるが、「信長公記」によれば信忠が籠もった二条御所の隣に近衛前久の屋敷があり、その屋敷の屋根から鉄砲や弓矢を撃ちかけたとあり、これが前久黒幕説の根拠になっている。

然しながら信長と前久は互いに信頼する関係にあり、光秀謀反の黒幕ではあり得ないというのが定説である。

このあと、前久は遠江浜松に徳川家康を頼って下向している。秀吉も含め周りからの信長暗殺に係る疑いの圧力に抗しきれなくなったためとされる。

そして約9ヶ月後、前久は京に戻る。家康の取りなしによるものだった。

本能寺の変以後政権を固めつつあった豊臣秀吉は、小牧長久手の合戦で家康を屈服させることができず、朝廷の官位を以て権威を得ようと獵官活動に目の色を変えはじめた。

半ば強制された感があるが、前久は秀吉を近衛家の猶子にしている。関白になるためには五摂家の一つに入ることが必要だったからだ。

信長の死後、仏門に入り近衛家の家督を息子・信伊に譲り、武家と一緒に動き廻ることもなくなった。ただ、島津義久との交情は続き、前久の長文の書状が残っている。

このなかで前久は「武家の真似ごとをしている暇にもっと公家としての教養を高めるべきだった」と述懐している。

享年77才、近衛前久は武家になろうとして挫折したが、その生涯は自由で活動的であり、公家のままでは望み得ない生を全うしたと思うがどうだろうか。